



2020年大統領選 民主党指名争い リベラル派候補の乱立で左傾化強まる バイデン前副大統領の動向が焦点に

おいかわ まさや
及川 正也

(毎日新聞論説副委員長)

2020年米大統領選の候補者指名を争う来年2月の予備選・党員集会の開幕まで1年を切った。挑戦者となる野党・民主党は早くも指名レースが始まり、3月20日時点で16人の候補者が乱立する史上まれにみる大激戦の様相だ。全米のあちこちで支持者らを集めた演説会が開かれているが、いま一つ盛り上がり欠けるのが実情だ。それもそのはず。それだけ出馬しながら「本命候補不在」といわれ、そろって「反トランプ」というなら、差別化を図ろうにも

図れない。正式に候補者が決まる党大会までは1年半ちかくあるとはいえ、民主党の政権奪還への戦略はまだ描けていないのが現状だ。

30年ぶりの「本命」不在

まずは、3月4日号の米タイム誌(ウェブ版)の表紙の写真をみてほしい。ホワイトハウスの大統領執務室のトランプ大統領を窓越しに後ろからのぞき込んでいる15人の男



米タイム誌の表紙（2019年3月4日号）

女の姿が、「Knock, knock...」（ドアを叩くコン、コンの音）のことばとともに描かれている。最前列に並ぶのは、オバマ政権の副大統領ジョー・バイデン氏、女性のエリザベス・ウォーレン上院議員とカマラ・ハリス上院議員の3人だ。

タイム誌がこの3人を最有力候補と位置付けてクロウズアップさせたのかどうかはわからない。しかし、米国人でもせいぜい顔と名前が一致するのはバイデン前副大統領ぐらいではないか、と米国の友人は言う。民主党内で好き嫌いがあっても、知名度は抜群のヒラリー・クリントン元国務長官が大本命視された2016年予備選とは様変わりしている。タイム誌はこう指摘する。

「トランプ大統領に対抗するために有権者が選ぶ候補者は、今後何年もの国のイデオロギーの方向性を示すことになる。にもかかわらず、決め手となる候補者がいない。これは1988年以來のことだ」

民主党内にはトランプ氏をやっつけなければ、という共通認識はあっても、米国の将来を託すだけの候補がいない。肩を並べて遠くから控えめにノックするのではなく、周囲を蹴散らしてでも大統領執務室のドアをこじあけようという勢いのある候補はいないのか。こんなジレンマを表すようなタイム誌の表紙である。

リベラル派の乱立が示す左傾化

その中から支持率などをもとに有力候補8人を選び、政治的ポジションなどを基準に座標軸に配置してみた。リベラル派は6人を占める。そのうち4人は女性だ。伝統的な保守の系統である共和党に対し、少数派を尊重し、多様性を受容する民主党は、そのすそ野の広さが強みだ。2008年大統領選で初の黒人としてオバマ氏が勝利したときは、「異文化連合」と呼ばれた。女性、若者、非白人、LGBT（性的少数派）などの支持を集めたところから、付いた名称だ。

今回の候補者の顔ぶれはまさにそれを体現している。若手のエースである女性のカマラ・ハリス上院議員



2回目の米朝首脳会談に臨むトランプ米大統領（左）と金正恩朝鮮労働党委員長

＝ベトナム・ハノイで今年2月、米ホワイトハウス提供公式写真

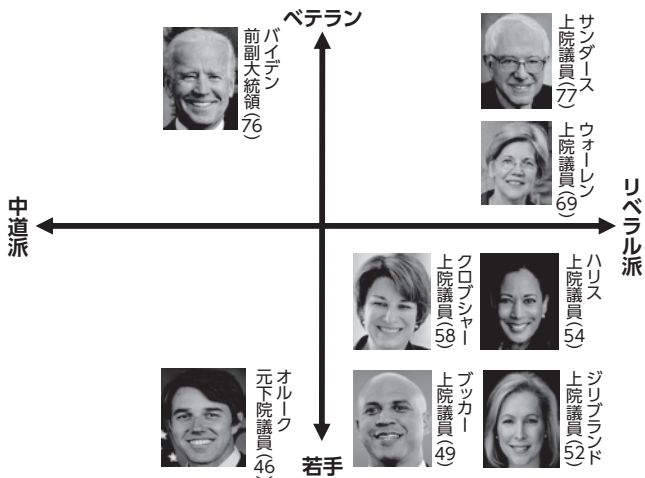
(54)とコーリー・ブッカー上院議員(49)はともに非白人の移民の家庭に生まれた。バーニー・サンダース上院議員(77)と女性のエリザベス・ウォーレン上院議員(69)はともに「オールドパワー」の健在を示し、超リベラル政策を訴えることで知られる。大統領の暗黙のルールといわ

れた「WASP」(白人、アングロサクソン系、プロテスタント)は神話になり、多様性が新たな価値観の時代だ。ハリス氏はインド系移民の母とジャマイカ系移民の父の間に生まれた。黒人系有数のハーワード大学などを卒業。カリフォルニア州司法長官を経て、2017年から同州選出の上院議員。多様性を持つオバマ前大統領の生い立ちと重なり、カリスマ性もある。若者が希望を持てる移民政策を主張し、トランプ政権批判の急先鋒として名をあげてきた。出馬表明には数千人の観衆が参加する人気を博したが、国政での力量は未知数だ。

同じ若手のブッカー氏は、ニュージャージー州選出の初の黒人上院議員。西部の名門スタンフォード大学を卒業し、世界最古の国際的フェローシップ制度である英オックスフォード大学のローズ奨学金を受けたスーパーエリートだ。イェール大学卒業後に政界入りし、同州のニューアーク市長を経て2013年から現職。SNS(ソーシャル・ネットワークキング・サービス)を駆使し、演説も巧みだが、ハリス氏と同じく国政経験はまだ乏しい。

一方、リベラル派のベテラン組の注目株はウォーレン氏。貧しい幼少時代からハーバード大学教授を経て2013年に上院議員に上り詰めた。労働者を守り、「アメリカンドリーム」を復活させる、と意気込む。特徴は過激なリベラル政策だ。「ルールなき市場は盗人の集まり」と「反ウォー

主な民主党候補の政治的ポジション(予定者含む)



※写真は各候補者・予定者の公式ウェブサイトなどから

「ルストリート」を持論とし、巨大ITの解体にまで言及する。先祖には先住民がいると多様性を主張したが、ごくわずかの血しか流れておらず、先住民団体に謝罪する不手際もあった。

そしてリベラル派といえば、2016年の民主党予備選

でスターとなったサンダース氏がいまや代表格だろう。ポーランド系ユダヤ人移民の親を持ち、幼少時代は貧しい生活を送った。シカゴ大学卒業後は定職にはつかず、低所得者支援などに取り組んだ。市長、下院議員を経て2007年から上院議員。無所属だが民主党会派に所属。人種差別や格差の是正など少数派・弱者救済の政策に注力するが、「社会主義的」との指摘もある。

過去の法案への投票行動などを分析した米紙ニューヨーク・タイムズの分類によれば、民主党上院議員のうち、最もリベラルな議員トップ5のうち4人が今回の指名争いに出馬している。「最もリベラル」と格付けされたのはウォーレン氏。次いでハリス氏、3番目がブックー氏で、1人置いて5番目にサンダース氏が来る。「民主社会主義者」を自称したサンダース氏はリベラル色が強い半面、銃規制に慎重な姿勢を見せた経緯がある。

民主党内では2001年の米同時多発テロ後の愛国心の高まりから、リベラル派のレッテルを張られることに抵抗感を持つ議員が増えた。テロとの戦いの中で米国全体が中道右派化し、リベラルは時代遅れの感じすらあった。しかし、イラク戦争の泥沼化からリベラル派が少しずつ息を吹き返し、2008年のリーマン・ショック後の不況で大規模な財政出動が不可避となり、排他的なトランプ大統領の誕生でリベラル傾斜が加速している。

2016年大統領選の民主党予備選では、中道派のクリントン氏に対し、サンダース氏が善戦したことで、民主党内リベラル派は勢いを増す。東西冷戦下では米国が一番毛嫌いだした「社会主義」と批判されても、著しい格差にあえぐ米国では、むしろ福祉国家的な政策を求める声が高まっている。原則国民に民間保険への加入を義務付けた医療保険改革(オバマケア)もその一例だ。サンダース氏やウォーレン氏は公的保険の導入の必要性も強調している。

このため、民主党内を見れば、2016年にはサンダース氏が孤軍奮闘してリベラル勢力を結集したが、今回は多くの有力リベラル派候補が名乗りをあげたため、サンダース氏の独自性は失われ、リベラル派勢力が逆に分散されることになりそうだ。リベラル派全体の勢力は大きいとみられるが、それが一本化されない限り、スケールメリットを発揮することはできないだろう。どう集約されていくかが、リベラル派の課題となりそうだ。

中道派はどこまで通用するか

台頭するリベラル派に割って入る形で中道派の若手、ベト・オルーク元下院議員(46)が出馬表明したのは、3月14日だ。リベラル派の主要候補がほぼでそろって約1カ月後。聴衆に訴えかける演説スタイルから「オバマ(前大統領)の再来」などと話題になり、昨年の中間選挙でテキサ

ス州から旋風を巻き起こした「民主党の新星」の出馬は、予備選に新たな風を吹き込むか、と期待されている。

オルーク氏は、メキシコとの国境の街エルパソ出身。テキサス州選出の下院議員を6年間務め、昨年11月の中間選挙で上院への鞍替えを狙い、現職で2016年大統領選の共和党予備選に出馬した大物テッド・クルーズ上院議員と接戦を演じた。小差で敗れたものの、1988年以降、共和党の牙城になってきた保守州で大健闘したことは、中南米系移民が多いテキサス州がいずれ民主党の牙城へと変貌するのではないかとこの期待を民主党支持層に持たせた。

保守的な地盤で民主党が勢力を伸ばすには、中道的な路線をとる必要がある。アイルランド系移民の家系で、下院議員当時、民主党中道と中道左派のメンバーによる中道政治と財政保守路線の議員連盟「新民主党連合」(New Democrat Coalition)に参加していた。穏健派の同連合は、民主党議連では最大の101人を擁する。極端なりベラル政策から距離を置くオルーク氏の現実路線が民主党の支持拡大につながる可能性もある。

そこで注目されるのが、同じ中道派の重鎮であるジョー・バイデン前副大統領(76)の動向だ。オルーク氏が生まれた約2カ月後に上院選で初当選したバイデン氏はその後、36年にわたり上院議員を務め、ご存知のように2009年1月に就任したバラク・オバマ大統領のもとで8年にわた

り副大統領を務めた。議員時代は司法委員長や外交委員長を務め、共和党との超党派連合の一翼を担うこともあった。外交政策については一家言持つ。

2016年大統領選では、1988年、2008年に続いて3回目の民主党予備選にチャレンジしようとしたが、オバマ大統領から後継として本命視されていたヒラリー・クリントン前国務長官(当時)が出馬に動いたことで「(バイデン氏は)ヒラリーに勝てないと思う」と言われたことを後に明かしている。だが、本命候補が不在の今回、各種世論調査では30%前後の支持率を維持し、リベラル派のサンダース氏と競り合っている。

「ラン・ジョー・ラン」。オルーク氏が出馬表明する2日前の3月12日、ワシントンでの全米消防士協会に招かれて演説したバイデン氏に、会場の聴衆から出馬を促す歓声が沸いた。バイデン氏は「もう2〜3週間待つてほしい。それまでそのエネルギーを貯めておいて」と冗談交じりに応じたという。世論調査でバイデン氏は序盤の重要州アイオワとニューハンプシャーで首位を維持しており、米メディアは「4月上旬に出馬表明」と予測している。

知名度ではサンダース氏と並んで高いバイデン氏だが、女性や人種の少数派が多く当選した昨年の中間選挙を踏まえ、「古きよき時代」の象徴であり「民主党の変革」を代表していない、という指摘もある。若い頃の人種差別的な

発言が米紙で報道され、これもイメージダウンになっている。中間層出身でアイルランド系白人のバイデン氏は白人労働者層にアピールするが、トランプ大統領の支持層となるため、情勢は読み切れない。

主要候補勢ぞろいの「スーパージュズデー」

こうした面々が大統領候補指名を争う予備選・党員投票は2020年2月に始まる。予備選での最大の焦点は、3月の「スーパージュズデー」だ。とりわけ、今回は、大票田であるカリフォルニア州が飛び入りしたこと、がぜん、注目度が高まっている。カリフォルニア州は従来、予備選最終盤の6月に行われてきたが、大幅な前倒しで、選挙情勢が大きく変わる可能性がある。

スーパージュズデーは、アイオワ州、ニューハンプシャー州、ネバダ州、サウスカロライナ州と単独で行われる序盤戦の結果を受け、多くの州が一斉に予備選・党員集会を行う投票集中日のことをいう。序盤戦の翌月の最初の火曜日に設定され、来年は3月3日だ。予備選の「天王山」とも呼ばれ、短期決戦の場合はここでの優劣で予備選の動向がほぼ定まり、候補者の数が一気に絞られていく。

とりわけ、来年のスーパージュズデーはいつにもまして「大決戦日」となるとみられている。というのも、現時点でこの日に予備選・党員投票を行うのは12州あるが、こ



及川 正也 (おいかわ・まさや)

早稲田大学政治経済学部卒。1988年毎日新聞社入社。水戸支局を経て、92年政治部。首相官邸、自民党、新進党、民主党、防衛庁（現防衛省）、外務省などを担当。2005年からワシントン特派員としてホワイトハウスや国防総省を担当。オバマ氏が勝利した08年大統領選では全米を取材で回った。政治部、経済部、外信部各副部長を経て13年4月、北米総局長。16年4月論説委員、18年4月論説副委員長。「琉球の星条旗」（毎日新聞政治部、講談社）、「検証『大震災』」（毎日新聞『震災検証』取材班、毎日新聞社）などの執筆、編集に参加した。

のうち、5州が主要候補の地元だからだ。ここで、地元州で敗北すれば勢いを失い、撤退はまぬがれない。一方で、ライバル候補の州で勝利し、候補者の地元でもない州で勢力を伸ばせば、追い風になるのは間違いない。

その5州の候補とは、ハリス上院議員（カリフォルニア州）、ウォーレン上院議員（マサチューセッツ州）、クロブシャー上院議員（ミネソタ州）、オルーク元下院議員（テキサス州）、サンダース上院議員（バーモント州）だ。予備選の勝者は、各州に割り当てられた代議員の合

計の過半数を得る（もしくはは得る見通しになる）ことで決まる。この日だけで、割り当てられる代議員数は、選挙で決まる全3768人のうち1360人が対象となる。全体の36%で、2月に行われる4州の代議員を含めれば、全体の40%にあたる1515人の争奪が決着することになる。

ここで注目されるのが、大票田のカリフォルニア州とテキサス州だ。それぞれ代議員数は416人、228人と圧倒的な多さで、ここが地元のハリス氏とオルーク氏が順当に勝利すれば、獲得代議員数で他候補を大幅にリードでき、勢いが増す可能性がある。逆にウォーレン氏のマサチューセッツ州は91人、クロブシャー氏のミネソタ州は75人、サンダース氏のバーモント州は16人と多くない。ここを他候補に譲れば撤退は不可避となるだろう。

一方、他の有力候補はスーパーチューズデーをどう乗り切ればいいのか。バイデン前副大統領やブッカー上院議員、ジリブランド上院議員らは、ここで一定のパフォーマンスを見せないと、撤退の淵に追いやられる危険性もあるだろう。現時点での調査では、バイデン前副大統領がアイオワ・ニューハンブシャーという皮切り州で優位に立つが、短期決戦を目指すなら、スーパーチューズデーで「ビッグウイン」する必要がある。

ジリブランド氏を抱えるニューヨーク州では前倒しの動きもある。知名度が低いだけにスーパーチューズデーで埋

もれる前に、勢いをつけようとする狙いがあるようだ。一部の報道ではアイオワ州の直後に設定する案もあるという。ブッカー氏も同様に全米的な知名度は低いだけに、スーパーチューズデーを乗り切るには、ライバル候補の地盤ではない州で大量に票を獲得する必要があるだろう。

米外交問題評議会のジェームズ・リンゼー上級副所長は3月初めに来日した際、私とのインタビュでこう語っている。「大票田カリフォルニア州のスーパーチューズデー参戦がゲームチェンジャーになる可能性は大いにある。有力候補の一角のハリス上院議員が勝利すれば、大きな追い風になるだろう。ただし、ほかには有力候補がひしめきあっており、だれもが地元州で勝ち、引き分けという結果になれば、選挙戦は長期化するかもしれない」。

もし、そうなると選挙情勢は混とんとするだろう。最近の予備選では、スーパーチューズデーで決着するケースはむしろまれだ。オバマ上院議員とヒラリー・クリントン上院議員が争った2008年民主党予備選では、スーパーチューズデーは「引き分け」に終わった。その後、オバマ氏が優勢に進めたが、決着は6月までもつれ込んだ。2016年で絶対的に有力視されたクリントン氏がサングラス上院議員の追い上げに苦戦したのは記憶に新しい。この背景には、代議員が最多得票候補の「総取り」ではなく、候補の得票数に応じて比例配分されることがある。

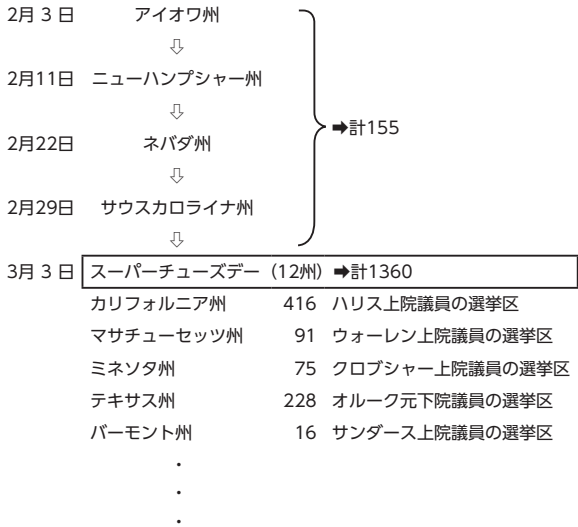
つまり、ある州でライバル候補に勝利しても得票数が小差なら獲得代議員数がそれほど変わらないという現象が起きる。今回は候補がひしめきあうだけに代議員が分散され、そうなる選挙戦が長期化していく。それを戦い抜くには、莫大な資金力や堅強な組織力が不可欠だ。とりわけ、組織力は人気だけではどうにもならないだろう。

民主党は今年6月から主要候補者による討論会を随時開催する。主だった候補だけですぐに16人が名乗りをあげており、討論会に出場できるのは、一定の支持率を持つ候補に絞られるが、それでも10人程度になる可能性がある。そこからふるい落とされていき、来年2月の予備選開始までに何人が残るかは見当がつかない。それだけに、受けて立つ共和党・トランプ陣営も焦点を絞れないようだ。

トランプ政権が警戒する候補とは

カマラ・ハリス、エリザベス・ウォーレン、コーリー・ブツカー。2020年大統領領選に向けてトランプ陣営が序盤戦で勢いをつけそうな候補としてこの3人をマークしている。と、米政治専門メディア「ポリティコ」(2月14日)が伝えている。トランプ陣営はこの3候補への「攻撃」を強める構えだという。ポリティコによると、トランプ陣営の現状分析は「安堵と驚きと恐怖」がミックスしているという。左傾化が強まることへの「安堵」、ハリス氏の数千人を集

2020年米大統領選・民主党予備選の序盤日程と代議員数



※3月19日現在。今後、変更あり

めた出馬表明への「驚き」、バイデン氏がトランプ氏の中西部の支持地盤を脅かしかねないという「恐怖」だ。左派では動員力を見せつけたハリス氏のほか、急進的な主張でポピュリスト的人気を博すウォーレン氏の訴求力、強力なドナー支援者を味方につけるブッカー氏の資金力にも注目しているという。集金力ではキャンベーン初日に610万ドルのオンライン献金を集め、サンダース氏の590万ドル

を抜いたオルーク氏もトランプ陣営からみれば要注意だ。当のトランプ大統領はどうかといえば、バイデン氏が「最も手ごわい候補」になると周辺に話しているという。トランプ氏は「バイデンはどの他の候補よりも幅広い訴求力がある」と言う。ただし、トランプ陣営では、リベラル旋風が吹く中ではバイデン氏は予備選を生き残れない、とみているとポリティコは報じている。

トランプ氏は2月5日の米連邦議会での一般教書演説で、「米国は決して社会主義の国にはならない」と強調した。社会主義を掲げて経済が破たん状態に陥った南米ベネズエラを引き合いに出しての発言で、議場で演説を聞いていた最左派のサンダース氏やウォーレン氏にあてつけた、と米メディアがはやし立てた。

トランプ氏は、2月の米朝首脳会談が事実上決裂に終わり、「ロシアゲート」捜査が山場を迎えるなど焦燥感を募らせているという。トランプ陣営は6月までに、左派集団と中道派候補の中でだれが最も求心力があるのかを見極める意向だとされる。さらに、情勢を見極めようとして出馬の機会をうかがっている候補もいると警戒している。例えば、テリー・マコーリフ前バージニア州知事やマイケル・ブルームバーグ元ニューヨーク市長ら有力者が機を見て出馬する可能性もあるとみている。